

ペシャワール会の今―前編

「苦しんでいる人がいたら、

放っておけない」

―中村哲先生の意志を継いで―

NGO（非政府組織）「ペシャワール会」（福岡市）やPMS（平和医療団・日本）を立ち上げ、パキスタンやアフガニスタンで人道支援活動を繰り広げていた医師の中村哲さん（中学生の時プロテスタント教会で受洗）が2019年12月4日、現地で武装した何者かに銃撃、殺害されて3年余りが経った今、中村医師と一緒に活動してきたPMS支援室室長で看護師の藤田千代子さんがさまざまな体験談を話した。

前編では、藤田さんがペシャワール地域で活動を始めたきっかけや、活動内容などの話を紹介する。



現地のスタッフに指導する藤田さん

現地の人たちは『だいたいこの位』と、準備をしていたので困っていた」と、藤田さんが現地の医療従事者を指導していた思い出を話した。それでも中村医師から教わったのは「私たちは、この人たちが見たことも聞いたこともないようなことをやろうとしているのだから、彼らが慣れるまで怒らずに見守ってあげて」。そして『アーシタ、アーシタ（現地の言葉で「ゆっくり、ゆっくり」の意）が口癖だった」と語る。

パキスタンの北部や隣国アフガニスタン東南部では、ハンセン病の他、下痢や栄養失調などを患う人たちが、干ばつなどのために年々増加する中、中村医師（PMS）は、医療支援活動を需要に合わせながら拡大していった。灌漑水利事業にも着手した。また、患者の中には、タリバンや米軍の軍事活動などを受け、アフガニスタンのジャララバードやその周辺から避難してきた難民もいる。

藤田さんはこのような活動の中で「中村先生から教わった讃美歌や聖書の言葉は、私の現地活動で活かされているし、支えになっている」と話す。

戦争や政権交代の中で危険度は増していったが中村医師は現地から離れなかった。そして3年前のある朝、命は断ち切られた。

―ペシャワール会とPMS―

ペシャワール会は1983年9月、中村哲医師のパキスタンでの医療活動を支援する目的で結成された国際NGO（NPO）団体で、PMS（略：Peace（Japan）Medical Services）は、総院長の中村哲医師率いる現地事業体。

PMSは医療団体であるが、病気の背景には慢性的な食糧不足と栄養失調があることから、干ばつにより沙漠化した農地の回復が急務だと判断し、今なお進行する大干ばつのなか灌漑水利事業に重きを置いている。



同会HP
QRコード

※藤田さんのインタビュー動画などが下記QRコードからご覧になれます。



「来る時が来た」
1984年からアフガニスタンの国境近くに位置しているパキスタンのペシャワールという都市を拠点に、医療などの支援に身を捧げた中村哲医師（享年73）。その死去の一報を知らされた当時の心境を打ち明けたのは、中村医師と30年以上も共に活動してきた看護師の藤田千代子さん。
藤田さんは1988年、働いていた病院で中村医師によるハンセン病の講演を聴いた。「ハンセン病は、早く見つければ手足等の変形を残さずに治療は可能だが、イスラム教では女性は肌を見せてはいけないため早期発見が難しい。そこで中村先生が女性の看護師を必要としていることが分かった」と振り返る。
そして1990年、藤田さんは自ら希望し、ペシャワールの病院に派遣された。最初は、日本と全く違う文化や生活習慣のある国で戸惑ったという。「日本では、薬の量は正確に測るのが当然。しかし、